

レヴァント回廊の歴史を探る

—第8次(2022年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査—

西山 伸一 中部大学人間力創成教育院教授

ジャンニ・アブドゥル＝マッシーハ 国立レバノン大学・文学人間科学学部芸術・考古学科教授

Investigating the history of the Levantine Corridor: The Eighth Season (2022), The Excavation of Phoenician Port of Batroun, Lebanon

NISHIYAMA, Shin'ichi Professor, School of General Education, Chubu University

ABDUL MASSIH, Jeanine Professor, Department of Arts and Archaeology, Faculty of Letters and Human Sciences, Lebanese University

西山
伸一
ジャンニ・
アブドゥル＝
マッシーハ

1. はじめに

レバノン共和国の地中海沿岸、ビブロス(現在のジュベイル)からトリポリ(現在のタラーブルス)の中間地帯に位置するバトルーン遺跡の調査は、2022年、コロナ禍が落ち着いた状況で実施された。

今回の調査は、遺跡の南方を対象とし、レバノン政

府文化省考古総局からの依頼を受けた緊急発掘調査であった。発掘調査は、2つの地点で展開された。1つは、昨年まで調査を実施したI(アイ)地区の南西拡張部(カバラン邸)であり、もう1つは、これよりさらに南方のJ地区(バヤードル地区)である(図1)。前者は、2022年5月25～27日、および6月20日から7月6日の期間で、後者は、4月26～29日、および8月29日から10月23日までの期間で実施された。

今回の調査で主に出土したのは、ローマ時代からオスマン朝時代の建造物、墓地であり、バトルーン遺跡の南方には主にこれらの時代の遺構が存在することが確認できた。つまり、鉄器時代・ペルシア時代の遺構が旧市街のマウンドに集中しているのと対照的にローマ時代以降の遺構は、マウンドの南方ならびに東方に広がっているのである。

2. I地区南西拡張部(カバラン邸)

この地区は、バトルーン遺跡の南端部分に位置し、2021年に発掘を実施したI地区の南西拡張部に相当する。調査面積は約40m²であった。2021年度に調査したI地区の工房区(特に染色関連の工房)は、公的機関により運営されたと考えられ、バトルーン遺跡のローマ時代における地域産業の一端を初めて明らかにした。そのI地区に南西方向に隣接する場所であったため、同様なローマ時代からオスマン朝時代の遺構が出土することが予測された。

「カバラン邸」(遺跡コード: BAT-1457)の北部に位置する細長い土地が調査対象であった。この部分の東半分は、ほぼ現代の攪乱により破壊されており、西半



図1 バトルーン遺跡と調査区の分布。遺跡の南方に今回調査したI地区(南西拡張部)、J地区(バヤードル区)が位置する。

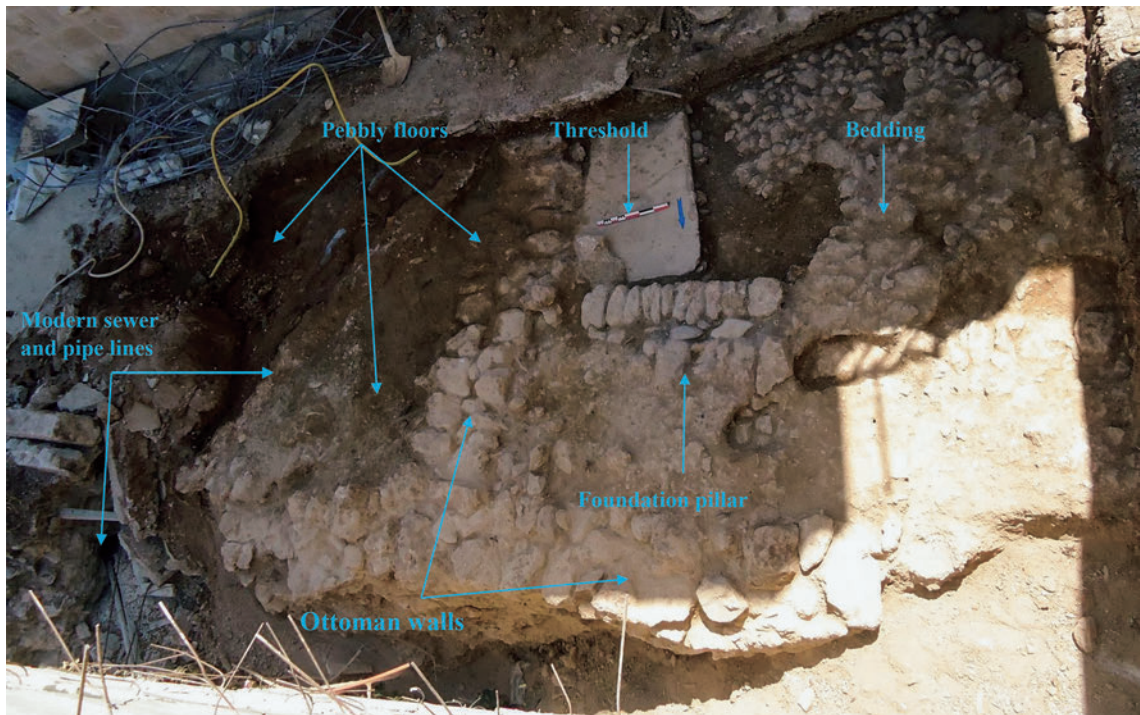


図2 I地区(南西拡張部)で出土したオスマン朝時代の遺構(北から)。

分において遺構が検出された。まず現れたのは、オスマン朝時代の石組み壁で構成された2つの部屋であった(図2)。東側の部屋は、現代の排水溝パイプにより大きく破壊されており、部屋の床面と思われる小石敷き面が断片的に確認できた。西側の部屋の南西部では、大型の砂岩の平石が発見された。おそらく入口部の敷石と考えられる。この平石の西側では土台の石敷き面が検出された。また平石の北には、柱の基礎部分が発見されている。

上記の2つの部屋を仕切る南北に走る壁の南部は、アーチ構造になっており、2つの空間の出入り口であったと考えられる(図3)。アーチ構造は、北側の東西に走る壁の西端でも確認されている。この北壁は、残存する長さ3.8m、幅0.6m、高さ1.3mを測り、荒く割られた砂岩が八段にわたり積み上げられていた。この壁は、西と東を現代の建造物により切断されていた。

このオスマン朝時代の建造物は、少なくとも2度の改築を経ていると考えられる。上述した土台の石敷き面の下から、さらに土台の痕跡と四段の石組み壁が発見された。この壁は、上述の北壁の南に位置しており、東端には大型の石が安置されていた。すなわち、西側の部屋は2時期の建築フェーズが存在したこととなる。

一方、東側の部屋は、廃棄後、比較的大きな丸石が多数放り込まれており、その下方に石灰岩のチップが

堆積した層があった。この層は、おそらく近郊の石切り場の作業で出た石灰岩のチップが、基礎面を平坦にする目的で持ち込まれたものであると考えられる。

オスマン朝時代の下からは、ローマ時代の遺構が検出された(図4)。上述のオスマン朝時代の部屋の下層から出土したのは、西側の部屋で発見された北西から南東に走る壁で、長さ約2m、幅60cm、残存高60cmを測る。荒く整形された砂岩からなる石組み壁は、四段の石組みをもっていた。この壁は、その下から現れた古い時代の壁を切っていた。古い壁は、東西方向に走り、長さ約2.9m、幅約0.9m、残存高約0.9mを測る。同じく荒く整形された砂岩により構築されており、地山の土壌の中に埋め込まれていた。さらにこの壁の基礎は岩盤の上に建てられていることが判明し、この調査における最下層は、ローマ時代であることが明らかになった。

一方、東側の部屋で発見された北東から南西方向に走る石組み壁は、おそらく上述の壁と接続するものと思われる。この壁は、長さ約0.8m、幅0.6mを測り、オスマン朝時代の居住層と現代の排水路により大半が破壊されていた。砂岩の石組みは一段のみが残っていた。壁は、岩盤の上に築かれており、ここでもこの建造物の最下層はローマ時代であることを示している。

オスマン朝時代の層からの出土遺物としては、土器、施釉陶器、磁器、およびパイプ先などがある(図5)。



図3 I地区(南西拡張部)のオスマン朝時代の東西の部屋を分ける壁(西から)。左手にアーチ構造の出入り口が見える。



図4 I地区(南西拡張部)のローマ時代の壁の出土状況(南から)。オスマン朝時代の東西の部屋の中にローマ時代の壁の痕跡が残る。

また遺構はないものの中世(十字軍時代)の施釉陶器(例えばズグラフフィート Sgraffito 陶器)なども出土している。ローマ時代の層からは、土器、東シギラータ Eastern Sigillata A (ESA)、円形のルームウェイトなどが出土している。

この調査区で出土した遺構や遺物の詳細な研究は、まだこれからだが、残念なことに、2021年に調査したI区と今回の南西拡張部の接続部分がすでに破壊されているため、建造物の相互関係を検証することが困難であった。今後は、出土遺構や遺物の比較研究を通して、2つの隣接する調査区の間を研究してゆく必要がある。

3. J地区(バヤードル地区)

この地区は、バトルーン遺跡の南方、居住区の郊外に位置し、過去の考古総局の緊急発掘調査(現在のサン・ステファノ・リゾートの場所)では、ローマ時代の墓地の存在が報告されている。またこの場所には、昔のトリポリ・バイルート間を結ぶ鉄道が南北に走っ



図5 I地区(南西拡張部)のオスマン朝時代の層より出土した施釉陶器と磁器。



図6 J地区の全景。ラインBが右手、ラインCが左手に位置する。

ており、今回の調査区は、そのすぐ西方に位置し、南にはバトルーンのモスクが立っている。現在の海岸線(バトルーンの南港に相当)からは130 m 内陸にある。

調査では、ローマ時代の「ボトリス」の重要な痕跡が得られただけでなく、オスマン朝時代の文化層も確認できた。ローマ時代で特筆すべきは、13基の墓が確認できたことである。このうち、7基が完掘された。この7基からは、12体の人骨が出土した。調査区は、線状のトレンチ、ラインBとラインCの2つに分かれている。これは道路に下水管を埋め込むための緊急調査として行われたからである(図6)。トレンチの規模は各約60 m²であった。

まず各トレンチでは、オスマン朝時代の文化層が確認された。しかし、この層は遺構を含まず、土器片、瓦片、動物および人骨片などが含まれていた。一部に



図7 J地区ラインBで出土した切石囲いの墓。



図8 J地区ラインBの第4号墓(土壙墓)で出土したガラス製ビーズなどの副葬品の塊。

はローマ時代の遺物も含み、攪乱があったことがうかがえる。

ローマ時代の層は、オスマン朝時代の層の直下で検出された。まず、ラインBのトレンチからは、12基の墓が発見され、そのうち6基が完掘された。墓はすべて単体の仰臥伸展葬であり、2つのタイプに分類できる。1つは、切石囲いの墓(図7)で、もう1つは、土壙墓であった。切石は左右6個ほど配置され、2つの短辺は各1枚の板石で塞がれていた。墓の上部は数枚の板石で覆われているケースもあった。本来はこのような板石の蓋があるのが通常の形態であったと考えられる。なお墓の石材はすべてバトルーンで採掘される砂岩であった。切石囲いの墓は、全長約2.4m、幅約0.9mの規模を測った。

土壙墓からは鉄釘が十数点発見されることが多いことから、おそらく木棺のようなものがあつたことが推測される。一方、切石囲いの墓からは、釘類が一切出



図9 J地区ラインCで出土した砂岩製サルコファガス。複数体の人骨が埋葬されているのが見える。

土しないことから、遺体をそのままか、布に包んで埋葬したと思われる。遺体の方向や顔の向きには、特に規則性は見出せないように思われた。しかし、これはより詳細な研究が必要である。頭骨の下には、小さな丸石が置かれることが多く、「枕」の役割を果たしたのかもしれない。

興味深いことに、切石囲いの墓から副葬品が出土することはほとんどなかった。逆に土壙墓からはビーズや土器などの副葬品が見つかった。例えば、ラインBの第4号墓には、ガラス製またはファイアンス製のビーズ13点、青銅製の指輪2点、石製紡錘車1点、骨製ビーズ2点、魚類の椎骨1点が副葬されていた(図8)。

副葬品の土器として一般的であったのがウンゲンタリウム Unguentarium であり、埋葬時にオイルや何かしらの液体を入れて安置されたと考えられる。サイズはさまざまなものが出土しており、いずれも釉薬のない素焼きのタイプで細長い円筒形の頸部が特徴的である。底部は小さな平底であり、表面に赤色スリップがかけられたものもあった。

一方、ラインCのトレンチからは、砂岩製のサルコファガスが出土した(図9)。石棺の規模は、全長約2m、幅約0.7m、高さ約0.6m、内側の深さ約0.35mであった。石棺内部には、計6体の人骨が埋葬されており、盗掘を受けていないプライマリーな状態で発見されたことは幸いであった。しかし、石棺を覆っていた蓋は発見できなかった。棺の内部は砂が充填されており、砂からは金箔片が見つかった。それ以外では、土器片、ガラス片が検出され、副葬品があつたことを示唆している。

6体の遺体のうち、比較的骨格が残っていたのは2体のみで、あとの4体は、部分的な骨しか発見されなかった。すなわち4体は、2次的埋葬であった。サル

コファガスに最後に埋葬された1体は、骨格が比較的が残っていた。フィールドでの観察によれば50歳ほどの成人男性で、仰臥伸展葬であり、顔は東を向いていた。骨格のわかるもう1体は、20～30代の成人男性で、仰臥伸展葬であり、顔は東を向いていた。後者の頭骨は見当たらなかった。

サルコファガスの下には3つの薄い文化層があり、その下は地山であった。すなわち、ローマ時代の墓地は、地山の上に築かれたことになる。この墓地の年代は、出土した副葬品から予察的に紀元前1世紀から紀元後4世紀と推定できる。しかし、まだ出土遺物の本格的な整理は始まったばかりであり、今後の研究に期待したい。

J地区の成果は、2009年および2018年の考古総局による墓地の調査を裏付けるものとなった。ローマ時代のバトルーン遺跡の居住区は、I地区から北方に広がり、その南は広範囲に墓地として利用されていたことになる。ローマ時代以前の墓がないことから、この時代にバトルーンの人口が増加し、新たな墓地を作る必要があったと推測できる。また単体での埋葬が一般的であったことも、墓地の空間を広げる要因になったと考えられる。また、これらの墓地は主に一般庶民が利用したと考えられる。そのため副葬品は非常に限られていた。しかし中には、サルコファガスなどのある程度社会的地位をもつ家族の埋葬もあった。

4. まとめ

2018年に開始したバトルーン遺跡の調査は、このところローマ時代からオスマン朝時代に焦点を当てる調査が続いている。しかし、これもバトルーン遺跡というフェニキア時代から繁栄した港町がどのように変遷したか、重要な歴史的資料を提供しているのである。今回のバトルーン遺跡の調査は、遺跡の南端の一部、および遺跡の南方に広がる墓地の様相の一部を明らかにすることができた。

ローマ時代からオスマン朝時代の物質文化の研究は、調査事例は多いもののレバノンではまだまだ研究が遅れている分野である。バトルーン遺跡の総合的な歴史研究を視野にいれつつ、発掘で出土したデータの研究

を進めてゆきたい。

レバノンでは、近年の歴史的な経済的危機がニュースとなっているが、地域開発は相変わらず行われているし、それを放置すると貴重な文化遺産が記録も取られず失われていくことになる。現地当局と協働しながら、調査研究という側面と文化遺産を保護するという側面の双方をうまく連動させてゆくことが、現地への成果還元の一環であるとの考えから、今後とも地道に作業を継続してゆきたいと思っている。

バトルーン遺跡の発掘調査は、レバノン大学、中部大学、および個人出資者からの支援を受けて実施された。調査にあたっては、レバノン文化省考古総局のSarkis el-Khoury局長、同局北レバノン地域担当官Samar Karam氏、および在バトルーンの考古総局職員の方々より多大なるご支援をいただいた。発掘調査では、Nada Elias博士(レバノン大学)、およびフリーランス考古学者Hassane Ghaddar氏とHiba Abdul Rahim氏の協力を得た。この場をかりて関係諸氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・ J. Abdul Massih and H. Ghaddar 2022 *Final Report of the Archaeological Excavations in the Real Estate "Batroun 1457/Kabalan Residence" Site Code: BAT-1457* (Report submitted to the Lebanese DGA, August 2022).
- ・ J. Abdul Massih and H. Ghaddar 2022 *Preliminary Report of the Archaeological Excavations in the Infrastructure Batroun Sewer Lines "Bayadar Area"* (Report submitted to the Lebanese DGA, November 2022).
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ 2019 「レヴァント回廊の歴史を巡る―第4次(2018年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査―」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』114-118頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ 2020 「レヴァント回廊の歴史を巡る―第5次(2019年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査―」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』35-39頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ 2021 「レヴァント回廊の歴史を巡る―第6次(2020年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査―」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』41-46頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・J. アブドゥル＝マッシーハ 2022 「レヴァント回廊の歴史を巡る―第7次(2021年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査―」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』38-42頁 日本西アジア考古学会。